

---

# 氷中花

無大琥子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

氷中花

### 【Nコード】

N3185B

### 【作者名】

無大琥子

### 【あらすじ】

子どもの頃の初恋？のようなもの、のはなし。

幼い日のことです。

私は雪の公園でひとり、うさぎを作っていました。緑色のベンチに敷かれた白いクッションを削り取り、手のひらで楕円に固め、二枚の葉をさします。

小さなうさぎ、大きなうさぎ、中くらいのうさぎ。親子三羽、私と同じ一人っ子。

誰もいない朝でした。夜とは違ってかわった晴天で、雪の反射光が清涼にきらめいていました。

私は絵本で読んだ雪の国の姫君にでもなったような空想に浸っていました。そして今度はお城を作ろう、などと思いつきました。子ども一人で作れるわけもないのに。

その時ふいに、ざく、と足音がしました。

ふりむくと見知らぬ少年が立っていました。私と違ってマフラーも手袋もつけていません。青いセーターに紺色のジャージのようなズボンをはいて、髪はくしゃくしゃ。色黒で少し粗暴そう。

寒くない？と聞こうとすると、少年は無愛想に、あるいは不器用に、私に何かを差し出しました。

見ると、かじかんだ手のひらの上には、赤い椿を氷と雪で閉じ込めた、氷中花。

透き通る椿の美しさ。

私は小さな手袋に包むようにそれを受け取り

「キレイ」

と一言。

見上げると少年はすでに、背を向け駆け出していました。

椿のあでやかな赤は、いまでも冬ごと、私の胸の片隅を染めます。

あの時どうして、「一緒にお城を作らない？」と彼の背中に叫ぶことができなかったのでしょうか。

私はやはり、雪のお城を作れませんでした。

いつの日かお礼を言えますか。

(後書き)

初投稿です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3185b/>

---

氷中花

2010年12月16日03時18分発行